



プラネティストが行く 5

ユーラシア大陸のへそから学ぶソフトパワー

中村 繁夫

写真・桃井和馬 野田雅也

世界のレアメタルを探していると面白い国にめぐり合うことがある。そのひとつが「ユーラシア大陸のへそ」にあるカルメキア共和国（ロシアの自治共和国）である。この雄大な国を訪問して驚いたことがいくつもある。カルメキアはカスピ海の北側に面する美しい草原国家であるが、欧州圏で唯一の仏教国なのである。周辺はキリスト、イスラム教国家に囲まれているが、チベット仏教の影響が強く、ダライラマ14世がよく訪問する。

カルメキアの国民の大半はモンゴル系民族の混血で、顔も日本人とそっくりである。資源もなくこれといった産業もないカルメキアが安定しているのは現国家元首であるキルサン・イリユムジノフ大統領のリーダーシップによるところが大きい。大統領はロシアでも有数の資産家と言われているが、同時に世界チェスチャンピオンという変り種でもある。カルメキアは農業国家で、経済的に豊かな国ではないが文化、福祉、教育の面で恵まれているために国民は大変幸福そうに見える。大統領は欧州圏最大の仏教寺院を建立し、福祉制度も整えたので、国民は安心して老後を送ることが出来るのである。教育レベルも高く、若者にも教育の機会均等が定着している。また、カルメキアの首都エリスタの中心には大きなレーニン像がそびえ立っている。レーニンの祖父はカルメキア出身なのだ。

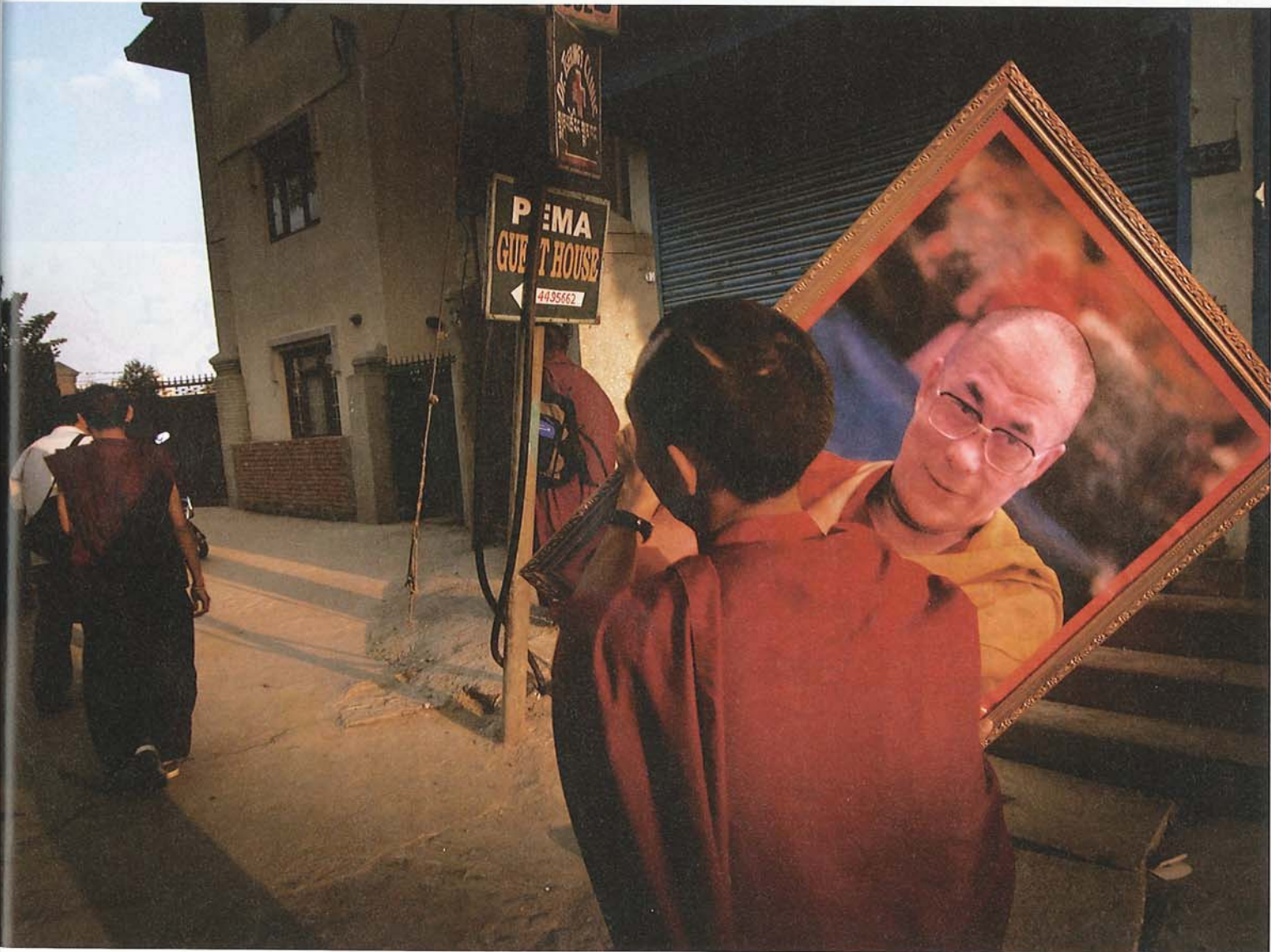
しかし、もっと意外なことがある。カルメキアのイキブルル村に、「サムライ」と呼ばれ尊敬されている日本海軍の生存兵が居るというのだ。資源大臣から偶然にその話を聞き、現場に行って生存兵に会ってみた。現地では「アンクルサーシャ」と呼ばれている彼の名

前は、中川義照氏（87歳）である。彼は19歳で出兵し、神風特攻隊としてアメリカ軍とフィリピンで戦った。その後、ソ連軍とサハリンで戦った。敗戦後、ソ連の捕虜として収容所生活に入る。森林の伐採や道路の造成などの重労働に耐え、運よく生き延びることが出来た。やがて、多くの収容所の日本兵は帰還するが、サーシャだけは通訳のミスで名前が抑留者名簿に見つからず、帰国することができなかった。その後、彼はロシア人の妻と新しい生活に入り、シベリアからウズベキスタン、ダゲスタンを転々としてから、最後の地をカルメキアにしたのである。彼は多くの運命の悪戯に身を任せながら異国の土地で望郷の思いを忘れたことはなかった。

そしてサーシャはついに、六十数年ぶりに祖国の土地を踏むことになる。夢にまで見た日本は全てが新しく信じられないことばかりであったが、サーシャの居場所そこにはなかった。妹たちはサーシャの帰国を慰留したが、彼の真の祖国はやはりカルメキアであった。サーシャにとって日本は単に経済優先国家であり、そこには精神的な心の絆は残っていなかった。サーシャにとって祖国日本とは何だったのだろうか？

我々日本人が知らない世界がいっぱいある。日本は経済大国だが、精神文化、医療福祉、教育分野ではカルメキアの足下にも及ばない。政治、行政、社会の面でも制度疲労から格差社会が拡がり、決して幸せな国家とは言えなくなってきた。ロシアや中国、北朝鮮などに対する認識も一面的であり、時として独善に過ぎる傾向もある。世界は確実に国境という概念を超越しつつある。日本人が国際社会で視野を広げるには経済だけでなく、文化や精神的な交流が必要である。その実現は相手の文化を理解するソフトパワーがなければ不可能だ。そして煩悶を繰り返しながらプラネティズム思想を実践していくことが国際貢献につながるのではないだろうか。

〔なかむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。近著に「2次会は出るな」（フォレスト出版）。「ももい・かずま」1962年生まれ。フォトジャーナリスト。世界140カ国を取材し、現代文明を表現する。第32回太陽賞受賞。



カルメキアと深い関係を持つ2人の男、一人はレーニン（前頁・桃井和馬）、そしてもう一人がダライラマ14世だ（当頁・野田雅也）。